

15 文化・学芸

(第三種郵便物認可)

2年前、岡田三郎助のまぼろしの名画であった「裸婦」(1935年、油彩)が、70年ぶりに私たちの眼前に姿を現した時、二つのことを確信した。それは、いまだ世に出ていない岡田の名画はまだまだ存在するだろうということ、そして何より、彼の作品そのものに宿る力、魅力が、今なおまぶしい光を放ち続けていることだった。

「裸婦」は昨年、佐賀県の所蔵となり、さらには昭和の絵画で初めて佐賀県重要文化財の指定を受けた。県立美術館には創立以来30年に及ぶ岡田研究の蓄積(作品の収集)があり、さらに「まぼろしの名画」の収蔵がなかった。この一連の出来事の中で、私たちの思いはどんどん膨らんでい

岡田三郎助—エレガンス・オブ・ニッポン—に寄せて

寄稿 県立美術館学芸員 野中 耕介



「支那絹の前」(大正9年、高島屋史料館蔵)

った。「今こそ、岡田の美の素晴らしさについて、広く世に問う絶好の機会である」とは間違いない。そしてついに、実に20年ぶりの大規模な岡田の回顧展となる本展覧会の開催が実現した。

展覧会の準備を進めながら、あらためて岡田の絵の魅力について考えてみ

た。岡田の絵といえは、まず「美人画」—美しい女性像の数々が思い浮かぶ。明るい光の下に遊ぶ、艶やかなで肌理細やかな肌の女性たち。その色彩のハーモニーは、「絵を見る」という

美は細部に宿る

甘美な夢の悦びを存分に与えてくれる。難しい理屈はいらない。私たちはただ素直に作品と向かい合うだけでも十分なのだ。さら

に「注意深くして絵の前に立つ」(松本誠一「佐賀偉人伝03 岡田三郎助」)ことで、岡田作品の美の秘密、さらなる奥深



① 顔の拡大写真。頬とあごに「く」く淡い笑を極めて薄く塗り、微妙な反射光を表現している。② 克明に描かれた着物の模様。絵具を盛り上げて表現された金糸の刺繍



さが見えてくる。「色が見え過ぎてその取捨に困るのだ」—岡田は自身の色彩の感受性についてこのように語っている(若田藤七「先生とお手本」エッセイ)。こうした岡田の筆致は、ものを「見る」と同時に、ものに「触れる」かのよう

な感覚をも私たちに思い起こさせる。岡田はしばしば「画家でなく彫刻家になれ」と言っていた。また、膨大に収集していた裂や着物の手触りをよく楽しんで、岡田芸術の美を支える源は、この「手の感触」を感じさせるほどの細部の描写へのこだわりではないか。しかも「これだけ細部を微細に描き込んでおきながら、決して全体を損なうことがない点も見事である。技術を究めた者」それが到達する境地を見る思いがする。

展覧会では是非、絵の前に立つ時間をいつもより少し長く、そして、虫眼鏡の目で眺めていただきたい。「美は細部に宿る」ことの奥しさ、そしてダイナミズムを感じていただきたいことを思う。

紙面編集・青原美紀